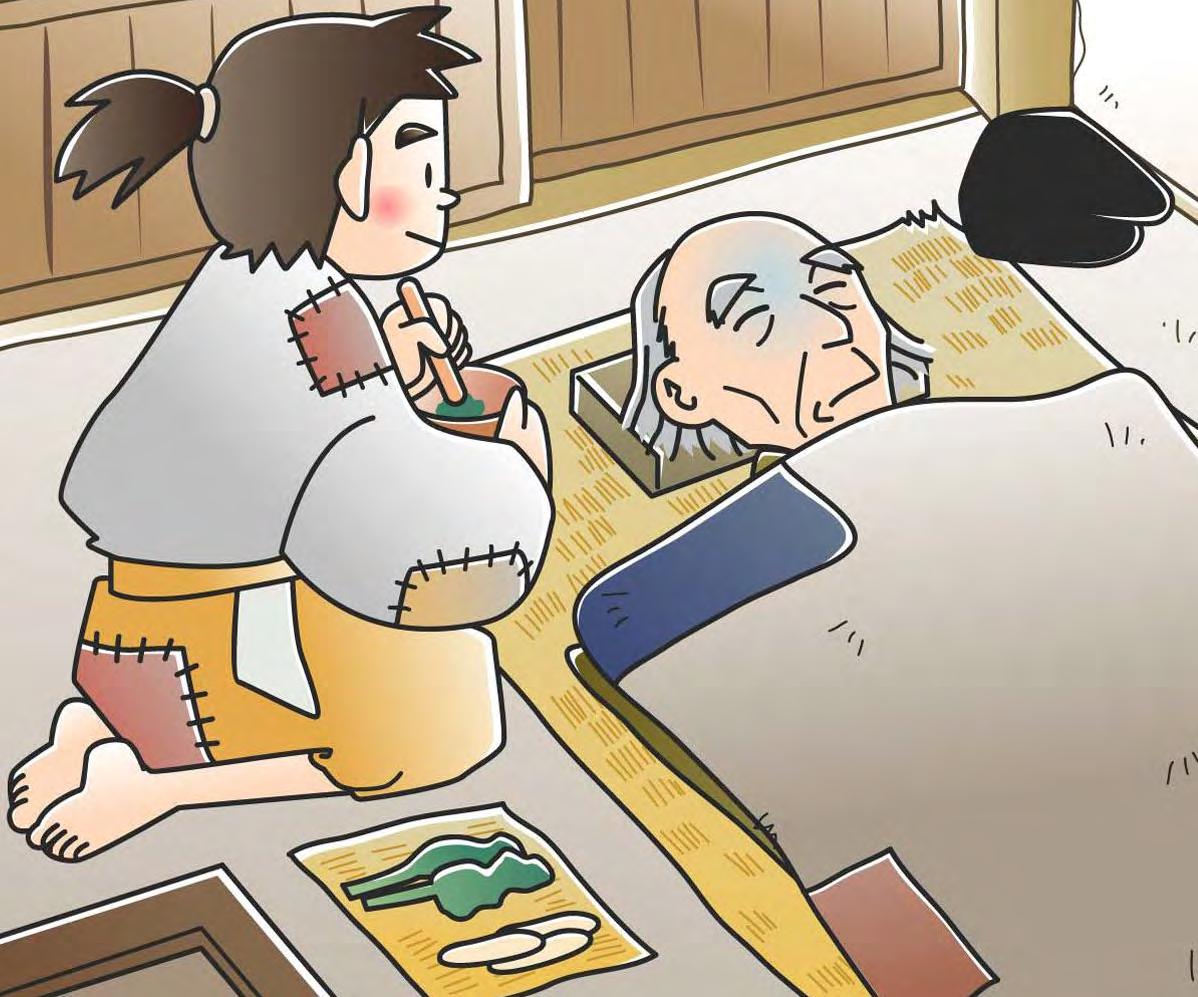


むかし、新倉のあたりに

一軒の貧しい農家がありました。

その農家には、年老いて寝たきりの父親と、二十歳くらいの若者が住んでいて、細々と生活をしていました。



若者は食事の世話から野良仕事まで、
朝は暗いうちから

夕は星が出るまで働いて、

お父さんの面倒を見ていたしました。



ある夏のことです。その日は朝から暑く、地上の草木は暑さですっかりなえていました。

若者は、その日もたきぎを取りに山に登つていきました。

たき木を背負い、

山をおりようとすると、

ふと近くに清水の湧く音が聞こえてきました。

その場所まで行つてみると、
こんこんときれいな水が湧き出していました。
飲んでみるととても冷たく、
その場にいることを忘れてしまったようでした。

若者は、持つていた竹筒に水を汲み取り、
お父さんに飲ませてあげることにしました。

帰宅してからお父さんに飲ませてあけると、
なんとびっくり。水はお酒に変わっていました。

お父さんはとても喜びました。



その後も、若者は毎日のように山へ行つては、
その水を汲み取つてお父さんにあげ、
お父さんを喜ばせてあげたということです。